




CITY OF YOKOHAMA



**URBAN DESIGN
YOKOHAMA**
CITY OF YOKOHAMA

横浜の都市デザイン



URBAN DESIGN YOKOHAMA

CITY OF YOKOHAMA

横浜の都市デザイン

横浜における都市デザインとは	1
都市デザインの取組の展開	2
都心部の骨格をつくる都市デザイン	4
既成市街地の都市デザイン	6
都市デザインマップ	8
都心周辺・郊外区のみちづくり	10
公共空間のデザイン	11
歴史を生かしたまちづくり	12
都市デザインの仕組みづくり	13
都市デザインの交流・発信	14
クリエイティブシティ	15
市民参加・市民協働のみちづくり	16
都市デザインのこれから	17

横浜における都市デザインとは

横浜の都市デザインは、1960年代後半、戦後の復興と高度経済成長期の様々な都市問題に対処し、横浜の自立的都市の構築を目指す戦略の一つとして誕生した。都市デザイン手法は、都市問題への対処にとどまらず、都市づくりにおいて機能性や経済性などの価値観と、美しさ、楽しさ、潤いなどの美的価値・人間的価値とをバランスさせ、特徴と魅力ある都市空間を形成する役割を担ってきた。

都市デザイン7つの目標

- 1 歩行者活動を擁護し、安全で快適な歩行空間を確保する。
- 2 地域の地形や植生などの自然的特徴を大切にする。
- 3 地域の歴史的、文化的資産を大切にすること。
- 4 オープンスペースや緑を豊かにする。
- 5 海、川などの水辺空間を大切にすること。
- 6 人々がふれあえる場、コミュニケーションの場を増やす。
- 7 形態的、視覚的美しさを求める。

都市デザインの取り組み方

1 都市構想のデザイン

新たな価値観に基づく魅力的な将来像と、実現プロセスを提示する。

2 企画的都市デザイン

都市づくりの事業の企画・立案から行う。

3 調整的都市デザイン

関係者の調整により、地域の特徴・魅力ある空間づくりを推進する。

4 誘導的都市デザイン

まちづくりの質的向上を目指す誘導ルールを確立し、効果的に活用する。

5 地域のマネジメント主体の育成・支援

事業のプロセスをデザインし、地域のマネジメントを推進する組織を育成・支援する。

6 デザイン開発

都市デザインの視点から公共施設などのデザインを開発する。

7 都市デザインに関する研究とPR
都市デザインをさらに充実させ、市民理解を深める。

1940年代～1960年代 様々な都市問題の発生

1945年：戦災による市街地の壊滅的破壊
空襲により市街地の41%焼失

1945年～：市街地・港湾施設接収による復興の著しい遅れ
港湾施設の90%、全市街地の27%が接収（1949年頃）

1950年代：高度成長期の東京の都市膨張に伴う無秩序な市街化
1945年人口62万人
1965年人口178万人

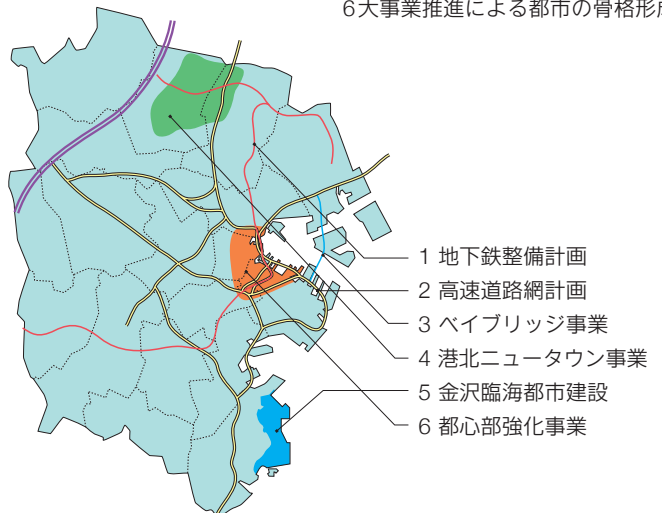
1960年代：未熟な市街地と人口急増による諸問題の発生

- ・スプロールによる農地・山林の破壊と学校・保育園・道路・下水道・公園などの不足
- ・都市の基幹的施設である鉄道・幹線道路・上下水道・廃棄物処理施設の早急な整備の必要性
- ・市街地全体を一体化させるための都市構造の再編、再構築の必要性
- ・都心部強化による就業機会の創出と魅力的な都心形成の必要性
- ・新住民の大量流入に伴う、市民意識、コミュニティ醸成の必要性

1960年代後半～ 横浜の自立的都市の構築を目指した3つの基本戦略

プロジェクトのプロデュース

6大事業推進による都市の骨格形成



- 1 地下鉄整備計画
- 2 高速道路網計画
- 3 ベイブリッジ事業
- 4 港北ニュータウン事業
- 5 金沢臨海都市建設
- 6 都心部強化事業

開発のコントロール

- ・法的制度が未整備のまま進む無秩序な開発行為に対する、要綱制定による総合的土地利用施策の開始
- ・宅地開発要綱（1968年）
- ・山手地区景観風致保全要綱（1968年）
- ・市街地環境設計制度（1973年）
- ・市域の25%に及ぶ「市街化調整区域」指定による緑の保全

都市デザイン手法の導入

- ・急速に発展する都市の活力を、良好な都市のストックとして適切な方向に導く。
- ・機能性・必要性などの価値観と、美しさ、楽しさ、潤いなどの美的価値・人間的価値をバランスさせ、特徴と魅力ある都市空間を形成する。

2011年 横浜の都市づくりの現在

- ・6大事業による自立的な横浜の都市構造が完成しつつある。
- ・開発圧力に対する先進的かつ意欲的なコントロールは、郊外部の緑地保全や良好な宅地ストックの形成に寄与した。
- ・都心部から始まった都市デザイン活動は、横浜市の各区、各局部や諸制度、市民によるまちづくり活動へと波及してきている。

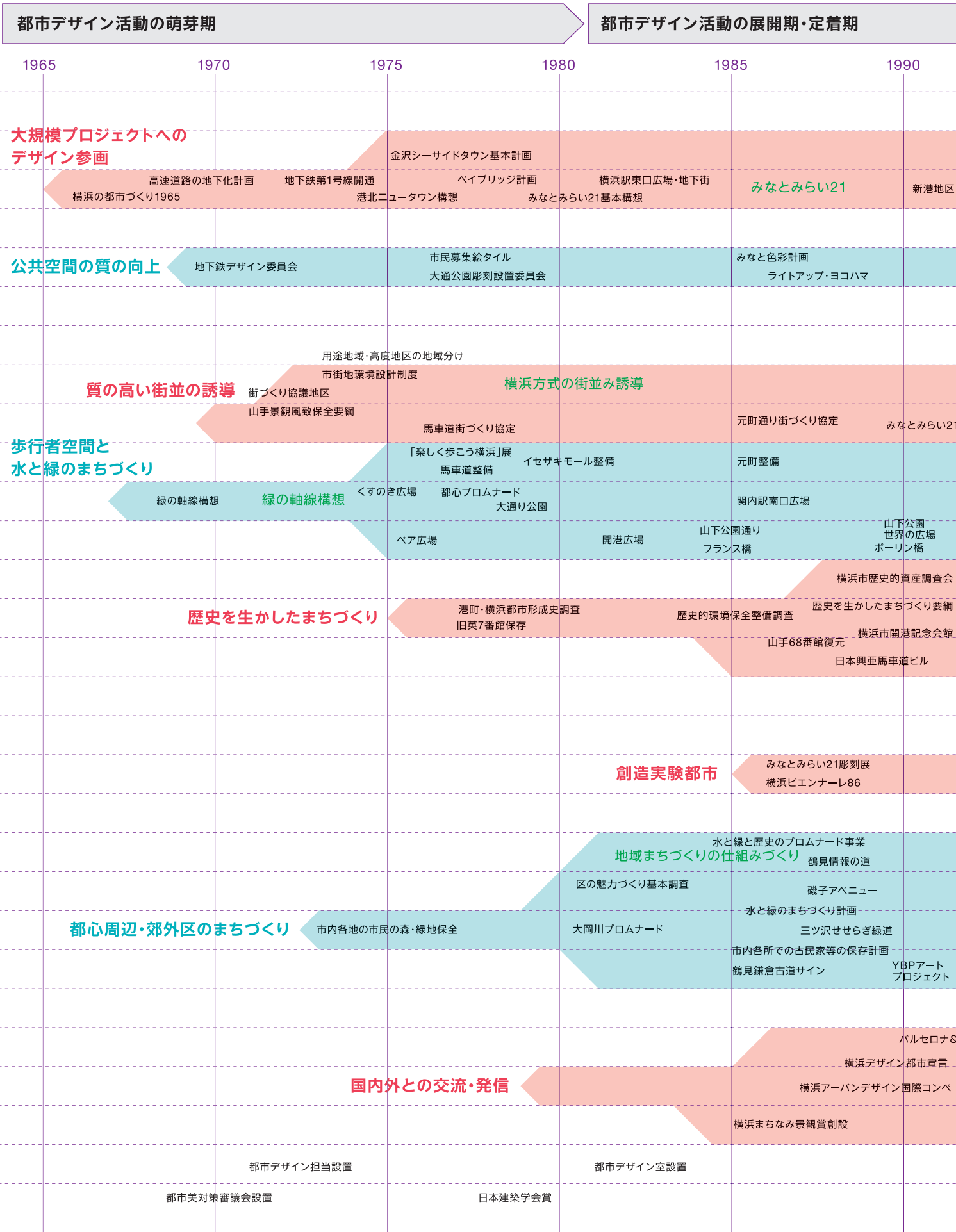
2011年～ 現在の課題とこれからの横浜

横浜をめぐる状況

- ・世界的な社会構造・経済状況等の変革
- ・環境意識の高まり
- ・人口減少や高齢化社会の到来
- ・国際的な都市間競争の激化
- ・依然として強い東京の求心力
- ・羽田空港の国際化や、港湾の国際ハブ港化
- ・リニア新幹線をはじめとした日本の国土骨格軸の転換
- ・東日本大震災の経済や生活への影響

横浜市の都市政策の方向性

- ・持続可能な環境先進都市
- ・人口減少や少子高齢化の到来を踏まえた都市構造の再構築
- ・国際的な都市間競争への対応
- ・地方分権・地域内分権によるきめ細やかな都市づくり
- ・防災に対する総合的な対応
- ・市民の価値観変化への対応



都市デザインの取組の展開

1995

2000

2005

2010

郊外の拠点プロジェクト

上大岡駅周辺地区
ランドマークタワー
ポートサイド地区

クイーンズスクエア

戸塚再開発
区画整理事業

都心臨海部・
インナーハーバー
整備構想

鶴見駅東口再開発事業

エキサイトよこはま22
北仲通北地区土地区画整理事業着手

インナーハーバー
を中心とした
都市構造の再構築

ストリートファニチャー
による道路景観向上

公共サインガイドライン

広告付きバス停留所事業

マリニタワー再整備

質の高い
都市空間形成と
その活用

大さん橋国際客船ターミナル
みなとみらい線駅舎デザイン
景観制度活用

横浜市景観ビジョン 屋外広告物条例改正
魅力ある都市景観の創造に関する条例

横浜市景観計画
都市景観ガイドライン

地区計画の活用

みなとみらい21
中央地区地区計画

みなとみらい21
新港地区地区計画

みなとみらい21
新港地区街並み景観ガイドライン

みなとみらい線駅舎デザイン

協働による
既存市街地再生

街づくり基本協定

中華街整備

都心部各商業エリアでの地区計画の導入

山手まちづくり協定

関内エリアマネジメント

中華街街づくり協定

楽しさや賑わいを支える
都市空間の醸成

グランモール公園

港の見える丘公園

アメリカ山公園

ウォーターフロント軸

ドックヤードガーデン

自動車道

赤レンガ倉庫・パーク

象の鼻パーク

環境にも配慮した
水辺空間の創出

エリスマン邸

旧横浜船渠第1・2号ドック
横浜情報文化センター

ベーリックホール

プラファ18番館

外交官の家
山手234番館
山手イタリア山庭園

旧富士銀行
旧第一銀行

東京藝術大学大学院

ヨコハマ創造都市センター

ハードとソフトの
クリエイティブな融合

文化芸術創造都市

BankART1929

BankART Studio NYK

万国橋SOKO

横浜トリエンナーレ

ナショナルアートパーク構想

OPEN YOKOHAMA

地域の個性を活かした
生活文化のデザイン

よこはま市民まちづくりフォーラム

パートナーシップ推進モデル事業
柏尾川プロムナード

地域まちづくり推進条例

横浜環状道路北線換気塔

環境配慮や人口縮小に
対応した都市像の追及

虹のプロムナード

いたち川プロムナード

大岡川河川再生事業

小雀配水池外壁

走川プロムナード

天王森泉館

長浜ホール

長屋門公園開園

本郷台駅前広場

ゆめおおおかアートプロジェクト

旧東海道みちづくり

ヨコハマシティ・クリエーションBAY90

第1回ヨコハマ都市デザインフォーラム

第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム

横浜港国際客船ターミナル国際コンペ

開港5都市景観まちづくり会議

横浜・人・まち・デザイン賞創設

横浜クリエイティブシティ
国際会議2009

都市デザイン活動の40年と
これからシンポジウム

国内外との
交流の促進と
都市デザイン研究

文化芸術創造都市
～クリエイティブシティ・ヨコハマの
形成に向けた提言

大学まちづくりコンソーシアム横浜

ポートサイド水際
公園コンペ

象の鼻地区再整備事業プロポーザル

自治体アーバンデザイナー養成基礎講座

毎日デザイン賞

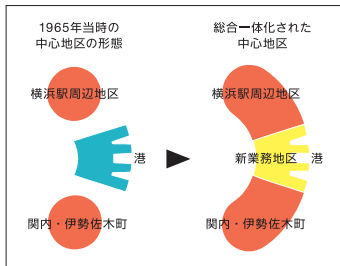
土木学会デザイン賞

日本グッドデザイン賞金賞

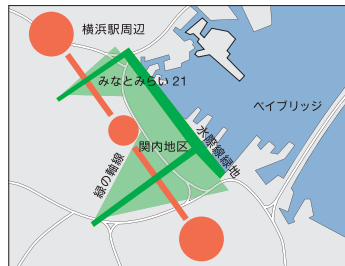
都市景観大賞
(日本大通り・家の鼻地区)

都心部の骨格をつくる都市デザイン

自立的な都市構造の確立を目的とした事業が都心部強化事業である。この事業は横浜駅周辺地区と関内地区の2つの都心地区を一体化するもので、都市基盤の強化、新たな都心の創造、海と緑を活用した軸線構築の3つがあった。これらの事業は、魅力的な歩行者空間形成、歴史的資産の活用、まち全体としての形態的な美しさなど都市デザインの視点も導入して進められ、構想から40年経過した現在、その形が具体的に現れるようになった。



都心部強化事業の基本概念
(横浜の都市づくり1965年)



都心部強化事業の基本構想
(再開発基本構想1970年)



計画当初の緑の軸線構想と大通り公園
山下公園から内陸部へ続く軸線(濃緑色)



みなとみらい21地区 新しい都心の創造

既存の市街地を結ぶみなとみらい21地区では、横浜駅周辺や関内とは違い、新しく作る「マスタープラン型」のまちづくりを推進してきた。地区はランドマークタワーや日産本社ビルのある中央地区と、赤レンガ倉庫のある新港地区とに大きくふたつに分かれる。中央地区では横浜駅側、桜木町駅側からそれぞれ海へと向かう軸=キング軸とクイーン軸および、そのふたつの軸を結ぶグランモール軸の三つの軸を主として、街区間を快適に歩いて回遊できるペDESTリアンネットワークを構築している。建築物は白を基調とし、クイーン軸の一連の高層建築群に代表される陸から海へ向かって建築高さを低くすることなどにより美しいスカイラインの形成を図ってきた。日本の近代港湾発祥の地である新港地区では、赤レンガ倉庫に代表される歴史性に配慮し、中央地区とは対照的な茶系をベースとした低層建築による街並み形成を図った。島としての個性を演出するため、新港に渡る自動車道をはじめ、水際線を通る歩行空間をつくり、居心地の良い水際の風景を体感できるようにしている。

都市軸の整備

都心部臨海のウォーターフロント軸と陸から海に向かう緑の軸線を形成し、横浜最大の魅力である海と緑を活用して都心部を有機的に結び付ける。



緑の軸線（開港シンボル軸）

くすのき広場

1974年の地下鉄工事の復旧の際に、従前の車道を整理し、歩行者空間を中心に整備した。市庁舎と一体的な空間となるよう、総合的な調整を行った場所で、横浜における最初の都市デザインの事例である。



大通り公園

1978年に運河を埋め立て整備した公園（幅30m、全長約1.2km）で、高架の高速道路建設計画に対し、緑の軸を優先したいとする横浜市の構想に沿って、国及び首都高速道路公団等と調整し公園の整備が実現した。緑の軸線の中でも、主軸となる公園である。



横浜公園

横浜公園は、日本最初の西洋式公園で、都心においてまとまった緑を確保し、人々の憩いの場となっている。1978年のプロ野球球団の誘致の際に市民株主を募集し整備した横浜スタジアムが立地し、広く市民に愛されている。



日本大通り

大火災を契機に防火帯として明治時代に整備された道路で、沿道の歴史的建造物とともに、魅力的な街並みを形成している。また、2002年に再整備を行い、歩道を拡幅して自然石舗装で仕上げ、ストリートファニチャーや公共サインの設置などにより質の高い空間をつくりだした。



ウォーターフロントの軸線

山下公園

関東大震災の復興事業で新設した、日本初の臨海公園であり、1980年代まで市民が海を楽しめる唯一の空間で、ウォーターフロント軸の起点となっている。2001年に再整備を行い、整備当初の姿に戻し、貨物線跡地の高架を撤去した。



海辺の緑地・公園

臨港パークや赤レンガパークなど、それまで近づくことのできなかった場所を連続した水辺空間として整備し、市民が自由に憩える公園として開放した。階段状に海へと下がっていく水際線を設け、都市の中に横浜らしい親水空間をつくりだしている。



開港の道

2002年に旧貨物線の山下臨港線跡を活用し、桜木町駅前から新港地区、山下公園を経由し、港の見える丘公園まで続く合計約3kmのプロムナードを整備した。帆船の絵タイルをたどると、ウォーターフロントの連続した風景を楽しむことができる。



象の鼻パーク

象の鼻パークは横浜港発祥の地でありウォーターフロントの軸線と緑の軸線が交わる場所にある。2009年の開港150周年を記念して整備し、この完成によりみなとみらい21地区と関内・元町・山手地区が有機的につながった。



既成市街地の都市デザイン

横浜の都市デザインは、まず都心部の再生事業において、実験的取組を行いながら手法を蓄積し、既成市街地である関内地区を対象に「くすのき広場」や港へのルートを示した「都心プロムナード事業」絵タイル整備など魅力的な歩行者空間形成に取り組み、その活動が評価されると、馬車道、元町などの商店街へと広がっていった。これらの地区では、公共空間の整備と地域独自の街づくり協定を組み合わせ、地域が主体的に取り組むまちづくりが展開された。行政・地域双方から問題提起し、協議や実験などを通して具体的成果を見せながら進める取組により、市民に理解しやすい形で実践へと展開されていった。



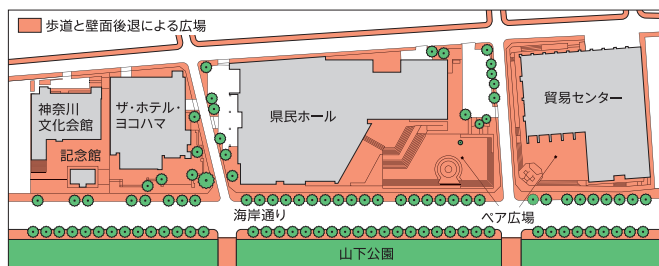
山下公園周辺地区

1971年の県民ホールや産貿センター間のペア広場の整備などを契機に、1973年に土地利用、壁面後退、建物の色彩等に関する「山下公園周辺地区開発指導構想」を策定し、周辺地権者とともに山下公園を中心としたまちづくりを図ってきた。元町と山下公園周辺地区のアクセス向上のため、人形の家

の建築の機会を捉え関係局との調整を行い、フランス橋、ポーリング橋、世界の広場などをつないだ歩行者デッキの整備を行った。開港100周年に灯台として建設したマリンタワーを、開港150周年にあたる2009年のリニューアルに際し、プロポーザルで民間事業者を公募し、同時に外観の色彩を変更するなどして、横浜の新しいシンボルとしてよみがえらせた。



世界の広場(上)、マリンタワー(左)、ペア広場(右)



建築物の形態指導による歩行空間の拡大



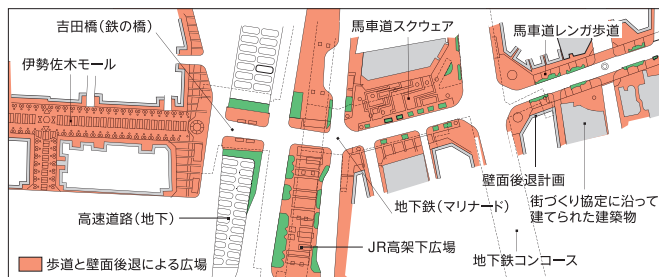
馬車道地区

馬車道はガス灯が最初に灯されている。同時に、建物用途、壁面後退、色彩、公共空間の維持管理など文明開化の新しい西洋文化が導入されたまちである。商店街を活性化するため、くすのき広場をモデルに1976年に歩行者空間の整備を行い、その後も改修再整備を進めている。車道を狭めて歩道を広げ、レンガタイルの舗装、ガス灯を整備するなどの工夫を行っ

ている。同時に、建物用途、壁面後退、色彩、公共空間の維持管理等の内容を持つ街づくり協定を結び、まちづくりを行ってきた。近年は、地域まちづくりルール、地区計画、景観計画を活用した取組も行われている。また、エリアマネジメントの取組も周辺で始まっている。



整備前の状況(左)と歩行者空間整備完成時(右)



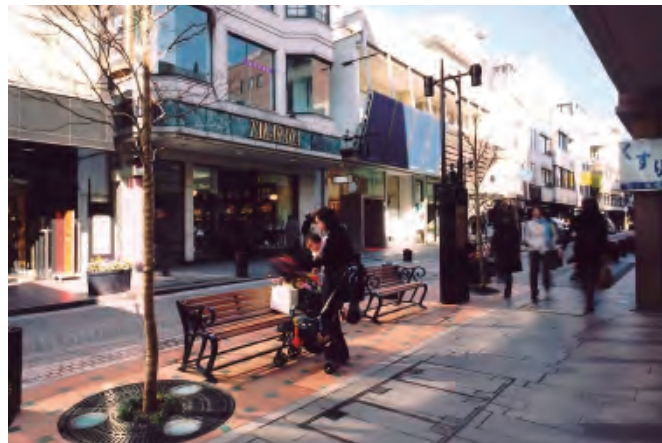
整備により拡幅された歩道部分

伊勢佐木町地区

1978年から、アーケードの撤去、電線地中化、24時間車両進入禁止による歩行者専用道化、ストリートファニチャー、彫刻の設置など全国的にも早くから本格的なモール整備を行った地区である。2005年には、伊勢佐木町一・二丁目地区で、パチンコ店などの風俗営業の進出に対応するため、地権者発意による地区計画の指定を行った。



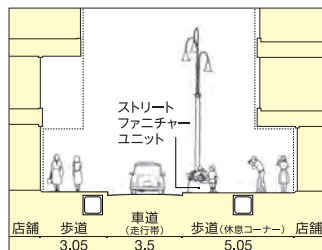
整備前の状況



元町地区

元町は山手居留地の外国人が利用する商店街として発展し、現在は女性ファッション関連商店を中心に独自のブランドを発信する商店街として全国的に知名度が高い。1955年からの第1期まちづくりの壁面線後退、1985年の第2期まちづくりでのショッピングモール整備事業と合わせ、街づくり協定を結び、まちづくりを推進した。2004年第3期にはモール再整備を行うと共

に街づくり協定も元町から河岸通り、仲通りさらに自治会へと拡がり、地区計画も導入されている。



低層部壁面後退による歩行者空間演出



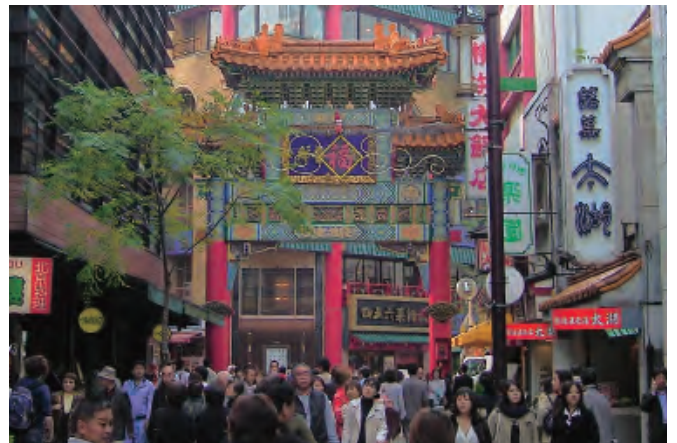
山手地区

旧外国人居留地であった山手地区は、戦後の接収解除によるマンション等の開発が相次ぎ、多くの西洋館が失われたが、1972年、低層街区の歴史的住宅文教地区の景観を保全する「山手地区景観風致保全要綱」を定めた。その後、公園や街路の再整備、西洋館の保全改修・活用事業が行われ、また、1990年代に入ると、住民との協働を目指して「山手まちづくり懇談会」が設けられ、山手234番館の市民運営実験事業なども行われ

た。2000年に入ってから地元に「山手まちづくり推進会議」が設置され、まちづくり協定や地区計画を策定して、住民主体による環境管理が定着しつつある。



山手234番館



中華街地区

日本で最大の中華街である横浜中華街は、2005年に電線地中化や自然石舗装などの整備と合わせ中華街街づくり協定を結び、独自のま

ちづくりを行っている。マンション建設予定地を買収し、媽祖廟を建設するなど、独自の文化を育てる活発な取組を行っている。

地域によるまちの運営

馬車道、元町、中華街、山下公園通り、山手地区などでは、自らのルールを作り地域が主体となつてまちの運営が行われてきた。最近では、こうした地域の活動がネッ

トワーク化され、YMC（山下公園通り、元町、中華街）協議会や関内・馬車道エリアマネジメント連絡協議会のように活動範囲が広がっている。



- | | | | |
|------------------------|---------------------|-------------------------|-----------------|
| ①—ポートサイド公園 | ⑱—赤レンガ倉庫・赤レンガパーク | ⑳—くすのき広場 | ㉔—マリインタワー |
| ②—横浜駅東口広場 | ㉑—横浜第2合同庁舎 (旧生糸検査所) | ㉑—横浜公園 | ㉕—世界の広場 (山下公園) |
| ③—はまみらいウォーク | ㉒—横浜銀行協会 (旧横浜銀行集会所) | ㉒—ストロングビル | ㉖—ポーリン橋 |
| ④—第二代横浜駅遺構 | ㉓—東京藝術大学大学院 (旧富士銀行) | ㉓—日本大通り | ㉗—横浜人形の家 |
| ⑤—グランモール公園 | ㉔—馬車道 | ㉔—三井住友銀行横浜支店 | ㉘—アメリカ山公園 |
| ⑥—臨港パーク | ㉕—日本興亜馬車道ビル (旧川崎銀行) | ㉕—横浜市開港記念会館 | ㉙—港の見える丘公園 |
| ⑦—スカイライン形成 | ㉖—横浜指路教会 | ㉖—横浜情報文化センター (旧横浜商工奨励館) | ㉚—山手資料館 |
| ⑧—ドックヤードガーデン | ㉗—吉田橋 | ㉗—横浜税関本関 | ㉛—山手234番館 |
| ⑨—日本丸メモリアルパーク | ㉘—旧横浜松坂屋西館 | ㉘—横浜海岸教会 | ㉜—エリスマン邸 |
| ⑩—桜木町駅前広場 | ㉙—イセザキモール | ㉙—開港広場 | ㉝—ベーリック・ホール |
| ⑪—ヨコハマ創造都市センター (旧第一銀行) | ㉚—大通り公園 | ㉚—象の鼻パーク | ㉞—フェリス女学院大学10号館 |
| ⑫—旧灯台寮護岸 | ㉛—高速道路地下化 | ㉛—大さん橋国際客船ターミナル | ㉟—山手公園管理事務所 |
| ⑬—自動車道 | ㉜—関内駅南口広場 | ㉜—ピア広場 | ㊱—カトリック山手教会聖堂 |
| ⑭—ナビオス横浜 | | ㉜—山下公園 | ㊲—山手イタリア山庭園 |
| ⑮—新港サークルウォーク | | ㉜—山下公園通り | ㊳—横浜共立学園本校舎 |
| ⑯—ハンマーヘッドクレーン | | ㉜—中華街 | |
| ⑰—横浜税関遺構 | | ㉜—元町 | |

都市デザインマップ



1



3



5



6



9



11



14



15



18



21



25



28



29



30



33



34



38



39 40



41



42



44



46



50 51



55



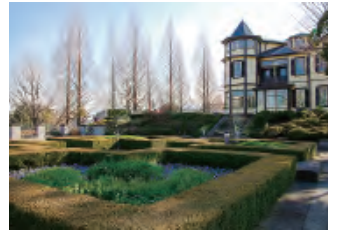
54



58



61



62

都心周辺・郊外区のまちづくり

日常生活に密着した快適な環境を創り出す「区の魅力づくり」は1980年代から始まった。まず「区」を単位に地域の特徴を見つけ出し、様々な事業を通して魅力ある空間づくりへの取組が行われた。駅前や区庁舎周辺など、市民が訪れる場所を対象に、道路、公園、公共施設などの環境整備を行い魅力的な空間形成を目指している。一方、都市化のかけで都市の裏側になりつつあった川沿いを、自然環境や水辺の景観に触れ合える空間に再生する「水と緑のまちづくり」は、大岡川、柏尾川、帷子川、いたち川などで川沿いのプロムナード整備や水辺に人が降りられる親水広場、周辺の山林の保全・活用などの環境整備として行われた。また、これらの環境整備は市民団体などと連携しながら進められた。また、6大事業でもある港北ニュータウンや金沢シーサイドタウンにおいても都市デザインの取組を行っている。

郊外区の魅力づくり

- 港北ニュータウン
- 倉部谷戸遊歩道／新田緑道／太尾緑道
- 大倉山プロムナード
- 寺家ふるさと村
- 十日市場駅前広場
- 中山駅ペDESTリアンデッキ
- 緑の尾根プロムナード
- 新横浜周辺地区
- 駅前広場／日産スタジアム／歩行者案内サイン／ストリートファニチャー
- 帷子川親水公園
- 鎌倉道プロムナード
- 長屋門公園
- 東戸塚西口広場
- 和泉川親水広場
- 天王森泉公園
- 上大岡周辺地区
- 上大岡／ゆめおおおかアートプロジェクト
- 戸塚周辺地区
- 交通広場／共同ビル／旧東海道みちづくり／水緑ランドデザイン
- 柏尾川プロムナード
- 栄区区心部文化ゾーン
- いたち川プロムナード
- 金沢区庁舎周辺地区
- 称名寺参道／金沢歴史の道／泥亀公園／夕照橋／走川プロムナード

区の魅力づくり

- 保土ヶ谷区の魅力づくり
- 西谷浄水場プロムナード／水道道プロムナード／川辺公園親水広場と帷子川プロムナード／保土ヶ谷歴史の道／
- 神奈川区の魅力づくり
- 三ツ沢せせらぎ緑道／神奈川宿歴史の道／東神奈川公園
- 鶴見区の魅力づくり
- 歴史と緑の散歩道／鶴見駅東口広場／情報の道／かに山公園
- 都心部の都市デザイン (P.6～7)
- 根岸森林公園
- 新本牧地区
- 南区の魅力づくり
- 大岡川プロムナード／弘明寺街庭／虹のプロムナード／南太田二丁目フレンド公園／大原ずい道／蒔田公園
- 磯子区の魅力づくり
- 海づり施設／磯子アベニュー／根岸駅前広場／洋光台駅前広場／坪呑金沢道
- 港南区の魅力づくり
- 桜道プロムナード／大岡川環境整備／下永谷駅階段
- 金沢シーサイドタウン
- シーサイドライン車両デザイン
- 小雀浄水場配水池



大岡川プロムナード



港北ニュータウン



本郷台駅前広場



金沢シーサイドタウン

公共空間のデザイン

都市空間の中で市民・来街者が利用する道路や駅などの公共空間のデザインは、都市の利便性・快適性に関わる要素の中でも大きなものである。そこで公共空間の質を高めるため、ストリートファニチャーや公共サインなど公共施設のデザイン開発とともに民間事業者に協力を求め、ライトアップやオープンカフェなどの公共空間を多彩に使いこなすための実験的な取組や仕組みづくりなど、総合的な演出を行なっている。

みなとみらい線 駅舎のデザイン

デザイン委員会（1993年）が策定した、駅そのものをギャラリーとしてデザインする「アーバンギャラリー」というコンセプトの下、著名な建築家に各駅のデザインを依頼した。地下にいながら横浜の街に来たことを感じられるよう、それぞれの駅が地上の街の特性・魅力・雰囲気や地下空間に引き込み、街との連続性、一体感を演出した駅舎を実現した。



馬車道駅（左）、みなとみらい駅（右上）、元町・中華街駅（右下）

市営地下鉄一号線

建築家、工業デザイナー、グラフィックデザイナーで構成された地下鉄デザイン委員会（1969年）を設置し「わかりやすい地下鉄」などのデザインポリシーに基づき施設のデザインを行なった。また、壁面レリーフを設置し、横浜らしさを演出した。



金沢シーサイドライン

整備時に車両・駅舎共通で青とオレンジをシンボルカラーとした。開業20周年を迎え新車両導入にあたり、デザイナーに専門家や地元の方々を加えたデザイン懇談会を経て、従来のシンボルカラーを踏まえつつも斬新なデザインを採用した。



みなとの色彩計画

横浜港をより個性的で活気あるものとするため、水辺空間の整備とともに港全体の色彩コントロールを行ない新しい風景を生み出している。陸からの視点に加えて、船から見ても色彩が楽しく変化していくような演出とした。



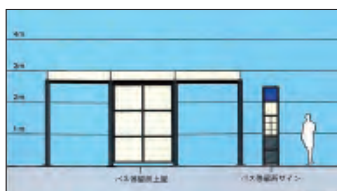
パブリックアート

横浜らしさやその地域の特性を大切にしつつ、街中にアートを設置することで新しい価値感を挿入し、街に個性や文化の香り、今までにない魅力をつくる。例えば上大岡ではビルの換気塔を覆う巨大なオブジェなど、19の作品が街に新しいランドマークをつくり出している。



ストリートファニチャー・ 公共サイン

ストリートファニチャーやサインは景観に大きな影響を及ぼすため、一定の基準を設けて色彩や形態、大きさを整えている。最近の取組では民間事業者との協働により維持管理が行なわれる広告付きバス停上屋を実現し、仕組みづくりも含めたデザイン調整へと展開している。



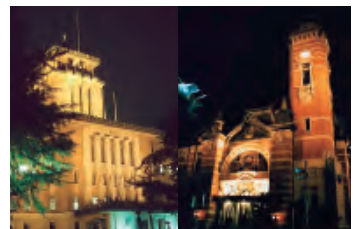
オープンカフェ

日本大通りの再整備の更なる展開として、社会実験などを重ねることで地域が主体となってオープンカフェが実現できる仕組みづくりを行ない、公共空間での新しい賑わいを創出した。



ライトアップヨコハマ

ヨコハマを特徴付ける資産を効果的に演出し、昼とは異なる魅力を持った都市空間の演出を目指して1986年に始まった。民間事業者も含めたヨコハマ夜景演出推進協議会を設立し、ライトアップの推進を行なっている。



歴史を生かしたまちづくり

横浜には、開港以来独自の文化が培われ、個性ある街並みがつくりだされてきた。関内地区の華麗な姿の近代建築、山手の西洋館、郊外部の古民家、あるいは風格ある土木産業遺構など、歴史的景観は「横浜らしさ」をかたちづくる貴重な資源である。こうした歴史的建造物をまちづくりに活かしていくため、1988年に「歴史を生かしたまちづくり要綱」を制定し、所有者や市民、専門家などと協力して歴史的建造物の保全活用を行うとともに、文化財制度とも連携しながら、まちづくりのなかで歴史的景観を保全する取組を進めている。

歴史を生かしたまちづくり要綱

横浜らしさを形づくっている歴史的景観を保全することを目的として、外観保全を最優先し、内部については所有者による積極的な活用を働きかけて、歴史的建造物の保全活用を図っていく仕組みである。景観上価値がある歴史的建造物を登録し、そのなかで特に重要で、所有者の同意が得られたものを認定している。認定に当たっては所有者と協議しながら保全活用計画を策定し、保全活用方針や保全部位を定めた上で、外観保全工事などに対して支援している。



認定第1号となった日本興亜馬車道ビル

日本大通りの歴史的景観の保全

日本大通りの再整備と同時期に行われた横浜地方・簡易裁判所や横浜情報文化センターの整備では、低層部に歴史的建造物を残したうえで、後ろに高層棟を建てるなどの工夫をして、日本大通りの歴史的景観の保全を図っている。また、新築する建物にも景観的配慮を求めている。



横浜情報文化センター(旧横浜商工奨励館)

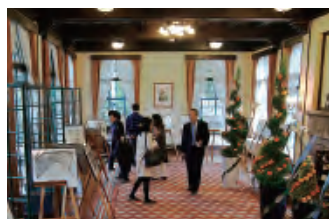


3つの橋梁と護岸が残されている「自動車道」

山手西洋館の保全活用

山手地区は、旧外国人居留地として、今も西洋館が数多く残されている横浜らしい景観のひとつである。歴史的建造物に愛着を持つ所有者が現在も住宅として活用しているものも多く、こうした歴史的景観を保全していくため、まちづくりと連携しながら、所有者の協力を得て西洋館の保全活用を進め

ている。さらに、エリスマン邸の移築復元をはじめとして、市が西洋館を取得し、公園内で保全活用する取組を行っている。市が保有する西洋館では、花による演出や音楽の演奏など、歴史的建造物の魅力を高める地域の歴史や文化に根ざした多彩な活動が市民によって行われている。



パレリックホールでの花の演出(左)とエリスマン邸(右)



郊外部の歴史的景観の保全

横浜の郊外部には、開港以前の横浜を感じることでできる里山などの景観が残され、古民家は景観を構成する要素のひとつであり、長年市民に親しまれてきた。歴史的建造物を地域の歴史や文化を体験する場として市民自らが活用する取組を、地域と連携して進めてきている。



旧安西家住宅主屋(長屋門公園内)

土木産業遺構の保全活用

横浜は、開港場になったことにより、外国人居留地であった現在の都心部を中心に、日本における西洋の産業や土木技術の導入の場ともなってきたため、市内には数多くの土木産業遺構が残されていて、横浜の魅力のひとつとなっている。ランドマークタワーの足下に広場などとして保全活用された旧横浜船渠第2号ドック、桜木町と新港地区を結ぶ鉄道跡地を活用したプロムナード「自動車道」や、明治時代の石積を積み直した象の鼻防波堤など、まちづくりのなかで土木産業遺構を市民が利用できる空間へと転換しながら、積極的な保全活用を行っている。

普及の取組

歴史を生かしたまちづくりに関して市民の理解を得るため市民向けのセミナーの開催、広報紙「歴史を生かしたまちづくり横浜新聞」やパンフレット「都市の記憶」の発行などを専門家らによって組織された一般社団法人横浜歴史資産調査会と協力して行っている。



「都市の記憶」(左)と「横浜新聞」(右)

都市デザインの仕組みづくり

様々なテーマや地域で都市デザイン活動を展開していく過程で、「山下公園周辺地区開発指導構想」などの要綱や基準などが策定された。要綱や基準は、法制度や数値基準だけでは規定できない、きめ細やかなデザインや景観への配慮を、当事者の創意を引き出す創造的協議により実現してゆくことを意図している。このような特徴を生かす形で横浜独自の制度として、市街地環境設計制度が策定され、近年では景観法の施行を契機に景観の条例を策定し協議型のまちづくりを進めている。

横浜方式の街並み誘導

山下公園周辺地区開発指導構想 (1973年)

県民ホールと産業貿易センターのペア広場やホテルなどの計画協議の経験を踏まえ策定されたガイドライン。壁面後退や歩道状空地の整備、建物の用途、色彩などについての基準が規定されていた。最低限の基準を定めたものではなく、基本的には事業者や地権者とより良いものとしていくために話し合う事項の指針を1973年にまとめたものである。

市街地環境設計制度 (1973年より)

開発指導構想と同様に、山下町周辺地区の協議事例などをモデルに策定した横浜市独自の制度。1973年の都市計画の見直しの際に、新たに導入された高度地区や容積率の指定を厳しくする一方で、公開空地の設置など地域への貢献度に応じて高さや容積率を緩和する。

街づくり協議地区 (1986年より)

1970年代より再開発予定地区や山下公園周辺地区、馬車道地区など建築指導を行っていた地区を「街づくり協議地区」として一本化した。関内地区などでは景観制度に移行したが、2011年現在、横浜都心、新横浜都心、鉄道駅周辺の商業・業務地区などを指定している。

地域独自のルールを活用

地区計画・建築協定・地域まちづくりルール

地域の環境保全やより魅力ある街づくりのために、地域の状況に即した独自のルールを地域住民等が協働して自主的に定め、お互いに守ってゆく制度に積極的に取り組んでいる。

- ・地区計画97地区
- ・建築協定179地区
- ・地域まちづくりルール12地区 (2011年12月現在)

屋外広告物

屋外広告物制度は、平成20年の景観制度運用開始とともに、都市デザイン室に所管替えが行われ、屋外広告物も含めた景観行政の推進体制が整えられた。2011年には、1956年に制定された条例を大幅に改正し、地域特性に応じた制度にするなど、時代の変化に対応した内容とした。

横浜独自の都市景観形成の仕組み

景観法の施行を契機に「横浜市景観ビジョン」と「横浜市魅力ある都市景観の創造に関する条例」を施行 (2006年)。景観法に基づく景観計画などの基本的・定量的な

ルールを定めた地区において、さらに質の高い景観形成を図るため、条例に基づき創造的な協議を付加できるシステムとなっている。(2011年時点)

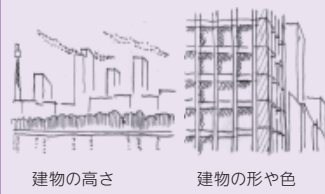
① 景観法「景観計画」(全市域)

- ・斜面緑地の開発行為について、法の高さの制限、緑化の制限を定める。
- ・高い擁壁の築造による圧迫感の解消を図る。

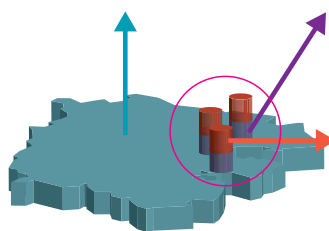


② 景観法「景観計画」(景観推進地区)

- ・建物の形や色、建物高さ等の定量的な基準を定める。
- ・届出・勧告等の緩やかな規制を行う。



建物の高さ 建物の形や色



【実際の運用状況】

都心部3地区：
関内、みなとみらい21地区 (中央、新港)

③ 景観条例 (都市景観協議地区)

- ・魅力を向上させる定性的な基準を定める。
- ・事業者と横浜市で協議を行う。



にぎわいの創出 歴史性の継承



都市デザインの交流・発信

横浜市は国際的な会議や展覧会といった、国内外各都市との交流を通じて、都市デザインやまちづくりにおける課題を明らかにし、研究、議論を積み重ねて来た。こういった活動は出版物として記録、発信していくことで、市民の都市デザインへの理解や協力促進、庁内外での新たな人材育成などに展開している。また、世界中、日本中から広く知恵を集めるために公共施設のコンペやプロポーザルを効果的に行なうことで、魅力的な都市空間を数多く創り出してきた。その蓄積は日本グッドデザイン賞金賞の受賞など、広く評価されている。



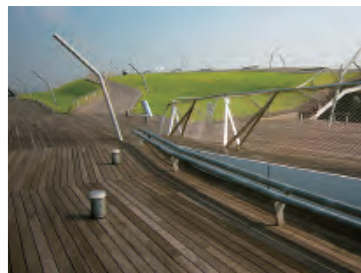
大さん橋国際客船ターミナル(左)と象の鼻パーク(右)



コンペなど知恵の結集

都市軸上に位置するなど、横浜の象徴となる重要な施設については、コンペやプロポーザルを行なって、国内外の優秀な設計者を迎え、話題性や質の高いものを目指してき

た。近年の具体例には大さん橋国際客船ターミナルや象の鼻パークなどがあり、完成後は多くの人が行き交う横浜の新しいシンボル空間となっている。



大さん橋国際客船ターミナルのデッキ(左)と象の鼻テラス(右)

国内外との交流による先進的取組の開拓

都市問題、都市デザイン、都市文化について研究、議論、提案する、国際会議「ヨコハマ都市デザインフォーラム」(1992年、1998年開催)を始めとする国際交流を行った。横浜の都市デザイン施策の発信とともに、新たな都市デザインの理念の開拓、その後の「地域まちづくり施策」の展開に大きく寄与した。また、バルセロナ・ヨコハマクリエーション、トリエンナーレなどのデザイン・芸術の国際展も開催している。国内では「歴史的景観都市協議会」「開港5都市景観まちづくり会議」など、自治体レベル、市民レベルの相互交流を推進し、まちづくり活動の活性化に寄与してきた。



開港5都市景観まちづくり会議

1858(安政5)年の日米修好通商条約により開港されたという共通の歴史を持つ5都市(函館・新潟・横浜・神戸・長崎)の市民団体等が集まり、景観まちづくりに関する情報・意見交換を行う。1993年から持ちまわりで開催し、2009年の横浜大会には5都市から220名が参加して活発な議論を行った。

研究・人材育成

研究面では、大学まちづくりコンソーシアム横浜による都市づくりの共同研究や、北仲スクール・UDCYのような学際的研究により、大学生だけでなく社会人、行政職員も交えて、横浜の都市づくりの方向性を探求している。また自治体職員の都市デザインスキルの向上を目指した自治体アーバンデザイナー養成基礎講座や都市デザイン研究会を開催している。



自治体アーバンデザイナー養成基礎講座

都市デザインのPR・普及

都市デザインは、都市文化の再発見と向上を目指した取組であり、市民の理解と協力が不可欠な取組である。都市デザイン活動をパンフレットなどの頒布を通して、情報発信するとともに、より質の高い景観形成に貢献した事業を表彰する「横浜・人・まち・デザイン賞」に取り組んでいる。

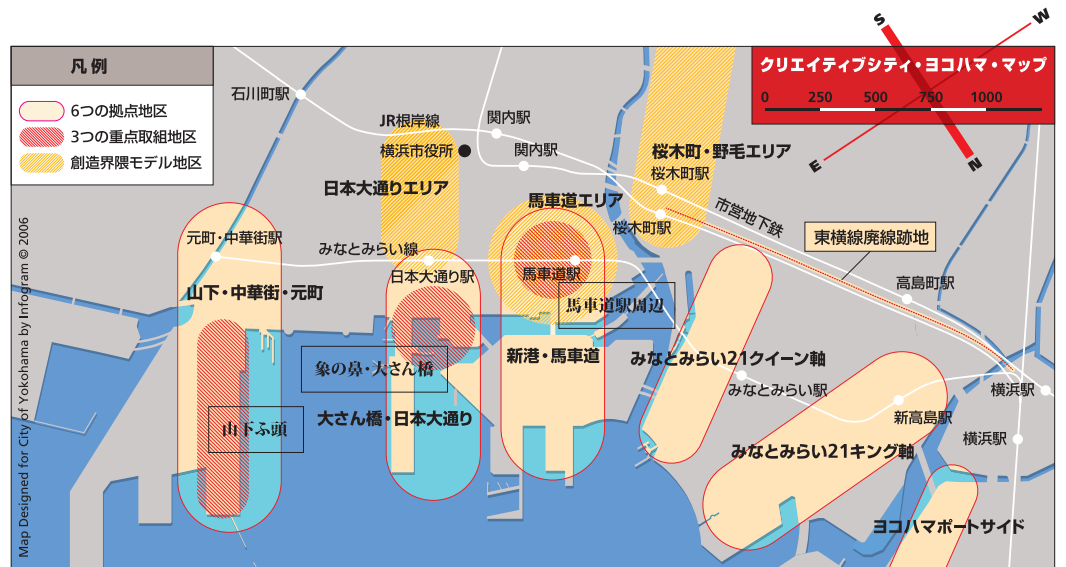


クリエイティブシティ

1980年代後半から「バルセロナ&ヨコハマ シティ・クリエーション」をはじめとする国際的なシンポジウムや会議を通し、横浜の自立的な発展を議論してきた。その中で、文化芸術の創造力と魅力ある空間、文化、多様な人材、産業経済を組み合わせ、都市の新しい価値や魅力を生み出すソフトとハードの施策を融合させた新たな都市ビジョンとして「クリエイティブシティ」という概念を掲げることとした。2006年に発表した「ナショナルアートパーク構想提言書」を皮切りに、その理念の実現を進めてきている。

ナショナルアートパーク構想

「クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」（2004年）の中で、その実現に向けた三つのプロジェクトのひとつとして提案された構想で、創造都市の都心臨海部におけるランドデザインである「全体構想」と戦略プランとしての「具体的な取組」で構成されている。都心臨海部の6つの拠点地区と内陸部の創造的限界を中心に、歴史的建造物や港の風景などの資源を生かしながら、文化芸術に代表される創造的な活動の積極的な誘導により、国際的な観光交流拠点の形成や創造的な産業の集積を図るとしている。



ナショナルアートパーク構想 提言当時の概念図(2006年)

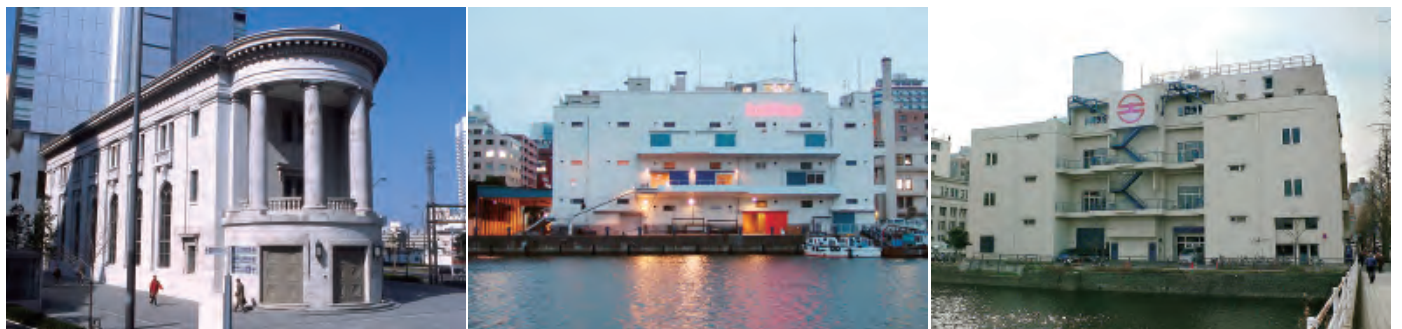
協力：NDCグラフィックス

創造界隈の形成

「日本大通り」「馬車道」「桜木町・野毛」の3つのエリアでは、歴史的建造物や倉庫、空きオフィスなどを、アーティストやクリエイターが創作・発表・滞在（居住）する創造的活動の場に転用することで街の活性化を図る「創造界隈の形成」を進めている。一定のまとまりを持ったエリアに創造機能、発信機能、育成機能、産業集積機能、市民交流活動などの複数の機能が相互に関連することで、市民の創造的活動の促進や、有能な人材の集積、新たなビジネスの創出などの効果が生まれている。



BanART1929 オープニングイベント(左)、日ノ出スタジオ(右上)、象の鼻テラス(右下)



ヨコハマ創造都市センター(左)、BankART Studio NYK(中)、万国橋SOKO(右)

市民参加・市民協働のまちづくり

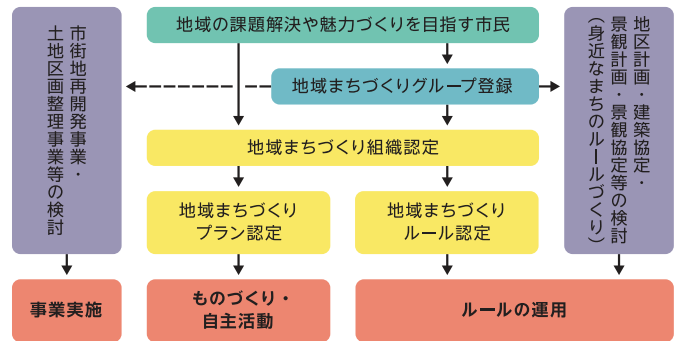
都市デザイン活動は、1980年代にはその活動領域を都心周辺部へ、さらに郊外区へと拡大する中で、まちづくりにつながる市民活動に着目していった。ヨコハマ都市デザインフォーラム（1992年）を機会に、市民まちづくりを支援する「地域展開事業」を実施し、都市デザイン室に「市民まちづくり担当」を設置した。さらに1996年よりパートナーシップ型行政の推進政策として、当時の企画局・市民局・都市計画局が連携した「パートナーシップ推進モデル事業」を全区で行い、市民協働の原則を定めた「市民活動推進条例」（2000年）、まちづくり分野では「地域まちづくり推進条例」（2005年）を制定した。

参加から協働のまちづくりへ

都心周辺部や郊外部での都市デザイン活動は、川や公園、道路などの施設整備から始め、地域住民の参加が重要なテーマとなった。市民と行政の関係は、当初は行政が呼びかけてものづくりを行うものだったが、やがて市民が自主的に地域の課題解決や魅力づくりを行うようになり、市民と行政の協働へと発展していった。

地域まちづくり支援制度

「地域まちづくり推進条例」により市民と市の協働による地域まちづくりが本格的にスタートした。条例によって住民などの地域まちづくりの担い手を登録・認定し、地域の方針やルールを作り上げていく。こうした市民の発意による活動をコーディネーター派遣や活動費用の助成によって支援し協働していく体制を構築してきた。



各地に広がる協働によるまちづくり

いえ・みち まち改善事業

防災上課題のある密集住宅街地の防災性向上と住環境の改善を住民・行政・専門家・NPO等の協働で取り組む、横浜独自の事業。「防災まちづくり計画」をまとめ、その実現のために国補助事業の導入のほか、地域まちづくり支援制度を活用して事業実施やルールづくりなどを行う。



初黄・日ノ出地区のまちづくり

「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」を中心に、一部の違法営業飲食店による環境悪化から、誰もが安心して歩ける健全な環境への再生に取り組んでいる。「NPO黄金町エリアマネジメントセンター」により、アートイベント「黄金町バザール」なども行われている。



京浜の森づくり

京浜臨海部の工業地帯の緑の環境づくりを立地企業・市民・行政の協働により「地区緑化計画」のもとに多彩な緑化プログラムに取り組んでいる。2009年からは横浜みどりアップ計画に基づく市民協働の地域緑化事業も始めた。



戸塚周辺のまちづくり

戸塚駅周辺の拠点的地区では再開発事業と区画整理事業が隣り合って同時に進行している。この機会を捉え、相互のデザイン調整をすると同時に、東海道宿場としての個性の創出や新しくつくる公園を周辺住民と一緒に考えている。



金沢八景における

地域と大学との協働

金沢区では、横浜市立大学・関東学院大学と協定を結び、両大学は区の課題に重点を置いた都市デザインの実習を授業に取り入れている。学生は実習を通じて金沢八景のまちづくりに取り組み、また地域と協働して駅前まちづくり発信拠点づくりも行っている。



ヨコハマ市民まち普請事業

「地域まちづくり推進条例」に基づく支援の一つとして市民グループから身近な街の整備に関する自主的な事業提案を募集し、公開コンテストにより整備助成金を交付して、提案事業の実施を支援している。これまでの5年間で25事業に助成が行われた。



都市デザインのこれから

40年にわたる都市デザイン活動は、これまで多くの成果を上げてきたが、都市が抱える課題、そこに暮らす人々の価値感など、活動を開始した当時と比べ背景となる社会状況は大きく変化している。当時の課題を解決するために策定された「6大事業」が概ね完成を迎えている今、現在の横浜や社会が抱えている環境やエネルギー問題、地方分権、少子高齢化社会の到来、国際的な都市間競争などの課題を改めて洗い出し、それらを解決するための新たな長期ビジョン、新しい時代の「6大事業」にあたるプランが必要とされている。新しいビジョンやプランを提示し、現在取り組んでいるプロジェクトや様々な都市デザイン活動のプロセスにおいて、ものや仕組みなど具体的に実践しながら実現していくことが重要である。

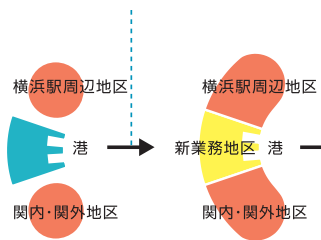
都心臨海部インナーハーバー構想

横浜の50年後の理想の姿について、横浜市立大学を中心に5大学が「大学まちづくりコンソーシアム横浜」を組織してまとめた「海都構想横浜2059」を踏まえ「横浜内インナーハーバー構想検討委員会」から市長あてに「都心臨海部・インナーハーバー構想」提言が提出されている。

都心に隣接する海を生き、豊かな水辺の環境を市民が利用できるまちづくりを進めるとともに、交通ネットワークによって支えられる様々な活動が集積する市街地の形成を進め、横浜市民と世界から集まる多彩な人びとが幸福と豊かさを実感できる都市を目標に、リング状の都市構造形成を目指す。

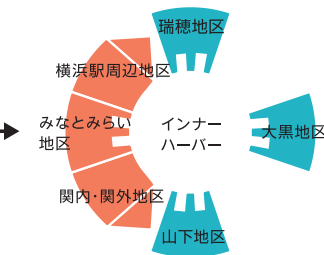
●1959年(開港100周年)

1965年: 都心部強化事業



1965年当時の都心部の形態

●2009年(開港150周年)

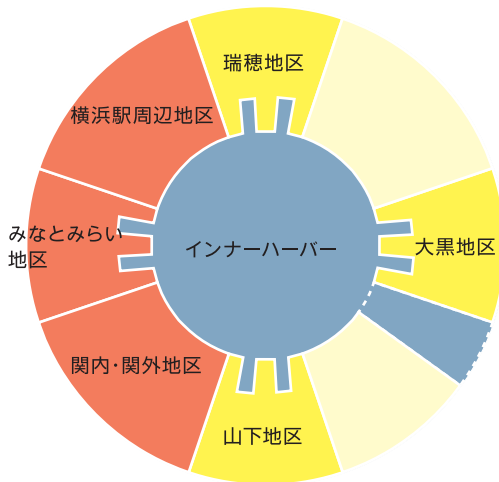


都心部の総合一体化

内港の土地利用転換

2010年: 海都横浜構想2059

●2059年(開港200周年)



海をいまく豊かな都心空間「海都」の創造

具体的な取組

シンポジウム「横浜の都市デザイン活動の40年とこれから」(2011年7月) 横浜の都市デザイン活動を振り返るとともに、様々な分野の専門家とテーブルを囲んでこれからの横浜、都市デザインについてアイデアを出し合った。

エネルギーをはじめとする環境問題や東日本大震災を踏まえた災害に備える都市デザインのあり方、コミュニティとのかかわり、市民や専門家、大学、企業など多様な人々との交流によって継続的に議論し活動を進めていく必要性など



シンポジウムの様子

都市資源の機能転換検討

東横線廃線跡地の魅力づくりとは「健康」「環境」を大きな主題に据え、地域性や創造性、コミュニティなど、活動を編み込むことで都市に残された潜在的な資源をまちの「顔」としてよみがえらせる計画である。そこで行なわれる活動を豊かな公共空間がサポートしていく好例をつくるとともに、横浜の「都

市デザインのこれから」をひとつの形で表すことを目標としている。



東横線跡地の利用検討

美しい港に注目した景観形成

港湾機能と都市が近接している横浜の特性を生かし横浜らしく世界に誇ることができる「美しい港」を目指し、インナーハーバー地区において景観形成などを進めていく。これまでの都市デザイン活動

の蓄積を継承しながらも、水辺における新たなまちづくりのあり方を示すなど他にはない「美しい港」の景観をつくることで、横浜の都市デザインの新しい可能性を打ち出していく。



都心臨海部・インナーハーバー整備構想